

『比較文化』創刊にあたって

帝塚山学院大学比較文化研究所長

福島理子

2018年4月、帝塚山学院大学国際理解研究所を引き継ぎつつ、名称を改めて帝塚山学院大学比較文化研究所が発足した。2年近くを経過してなお、本研究所の活動が軌道に乗ったと言える状況ではないが、今我々のめざす所を記しておきたい。

前身の『国際理解』は、国際社会における日本のあるべき姿を果敢に提言する、強い信念と確固とした方針に導かれたものだった。リベラリズムに貫かれたその姿勢を、本研究所、本誌においても受け継ぎたいが、実は新たな方法を試みている。思想や信条を共有する講師、執筆者を選んで、鮮明な旗色のもとに論壇や学界をリードしていく姿勢を示すのではなく、多様な、時には相対する立場の人を並べ、受け手自身が考え、判断するという方法だ。たとえそれがいかに素晴らしいものであったとしても、限定された主義や思想に捉われるのではなく、さまざまな価値観をめぐらしてこそ近づき得る、より善きものを探りたい。そのように考えている。

この文章を認めている現在、新型コロナウイルスの蔓延が世界中を脅かしている。中国の武漢で最初の感染者が発見されたのが2019年12月。瞬く間に罹患者は増え、地域も拡がり、3月末現在、はるかイタリアで多くの人々が亡くなっている。私は江戸時代の漢詩を研究する者であるが、18世紀後半に活動した学者の江村北海は中国の文化事象は200年を経て日本で再現されるとも言っており、そのタイムラグが漢詩文のような中国にルーツのある文芸形態においても日本の独自性をもたらす素因となっている。現代では、世界の片隅で起こった事柄が立ちどころに世界中の人の知るところとなり、流行も厄災も立ちどころに伝播する。「対岸の火事」などというものはもう存在しないに等しい。善くも悪くも、文化も均一化の方向に進んでいる。その一方で、持てる者と持たざる者、在来の者と新来の者との深刻な分断が広がっている。そのような時代において比較文化という研究分野にも、新しい方法論が必要ではあるまいか。当研究所が、時代に即して革めることによって守られる学問の良き伝統を継承するものであってほしい。

帝塚山学院大学比較文化研究所の紀要として『比較文化』をここに創刊する。本号は、2018年度前後期、2019年度前期に催された国際理解公開講座の講演録6本を収めている。特集として投稿論文を掲載する予定であったが、審査の結果いずれも収めることができなかつたのは、痛恨の極みである。次号では、広く比較文化に関わる論文を募集する。緻密にしてかつ創造性に富む論で紙面が彩られることを願っている。